○日本植物に關する最近の外國文獻（其二）（原　寛）

Merrill 教授は昨年滿 70 歲に達し7月末日アーノルド樹木園長を辭し，今後は研究に專心される筈である。Chronica Botanica は特に第 10 卷 3/4 號 p. 131-394(Aug. 1946) を 'Merrilleana' と名付けて同博士の紀念號とし，博士の略暦，論文目錄及び 1907 から今迄に發表された主要な一般的論說 23 篇を選びこれを再版集錄して發行した。同博士は前報に於て紹介した諸論文の外に Malaysia, Polynesia, New Guinea の植物に關する多くの論文を發表し，尙從來看過され勝ちだつた Rafinesque が發表した凡ての學名の目錄 Index Rafinesquianus の編輯を 1942 年以來續け，又多年に亙つて準備して居た 'A Botanical Bibliography of the Islands of the Pacific' も Contr. U. S. Nat. Herb. **30** : Part. 1, 404p. として Walker が Subject Index を附して本年 2 月に出版された。

この內 Rafinesque に關するものは 6 篇程あるが，日本植物の學名にも關係があり色々の意味で興味のある 'Rafinesque's publications from the standpoint of world botany', Proc. Amer. Philos. Soc. **87**: 110-119 (1943) の一部を紹介して見る。Rafinesque は 1783 年コンスタンチノープル郊外に生れ，1840 年フィラデルフィアで死ぬ迄，波瀾と苦難に滿ちた一生を送り，彼の性格も亦頗る變つて居り浮浪者的で思ふがままに行動した。彼の著書は何れも發行部數少く現在では極めて稀である爲 Index Kewensis 等にも脫落して居るものが非常に多い。彼は大約 3000 に上る新屬又は新亞屬を名付けて居り，今迄學者に全く無視されて居る植物名は 1200 乃至 1500 に達する見込である。整理の完了した羊齒類に就て見ると 62 の新名中，Index Filicum に載つて居るものは僅か 8 に過ぎない。併しこれ等の名を拾ひ出す事が現在の命名を覆す場合は極く少いのであつて，羊齒類では唯一屬と一種，卽ち *Struthiopteris* (non Weis. 1770 nec Bernh. 1801) Willd. (1809), *Matteuccia* Todaro (1866) の代りに *Pteretis* Raf. (1818) (クサソテツ屬) が採用され，又 *Equisetum praealtum* Raf. が認められるだけである。百年以上も看過されて居た多數の Raf. の植物名の目錄を作らうとする主な理由は，多くの命名上の變更をもたらさせる爲ではなく，今後發表されるかも知れない同名 (homonym) を避ける爲である。Raf. の屬名が現在廣く用ひられて居る屬名より早い場合には，後者を保留屬名とする事が常に可能である。或は多くの學者は Raf. の出版物を凡て不適法であるとしたいと欲するかも知れないが，旣に可成りの數の彼の屬名種名が一般に認められて居る以上，それ等の名を棄てずに彼の出版を不法なりとする事は難しい。Raf. の發表した多數の名の中で現今の植物學者に認められるものは極めて少數であり，又當然優先權上認められるべき屬名で旣に廢棄屬名 (nomina rejecienda) 中に入れられて居るものが約 75 もある。かくの如く多くの學者から無視された責は Raf. にあり，彼が短い報文を植物專門でない變つた雜誌にばらまき，又僅かに一卷位で終る數種の個人的雜誌を出版した點にある。最も甚しい例は Herbarium

Rafinesquianum (1833) と Western Minerva (1821) で，現在各々1部だけしか見出されて居ない。Raf. は全く彼獨自の見解と命名法を主張して多數の新名を發表した。世界中何人も比べるもののない 3000 といふ多數の新屬名を發表して居ながら，現在認められて居るもの約 25 で，廢棄屬名とされたものをいれても 100 であり 5% にも滿たないといふ事からも，彼の判斷の不當さがうかがはれる。併し彼の新屬中には今後採用されたり，又廢棄名に追加される名が未だそのままになつて居る。例へば *Hebokia* Raf., Alsogr. Amer. 147 (1838) は *Sambucus japonica* Thunb. に基いたもので，*Euscaphis* Sieb. et Zucc. (1840) (ゴンズイ屬) より古い。この變更を避ける爲に後者を保留名とする必要がある。熱帶で著名なホウワウボクは今も *Poinciana regia* Bojer と呼ばれる事があるが，屬名としては當然 *Delonix* Raf. が正しく，*D. regia* (Boj.) Raf. と云はるべきである。*Rytilix* Raf. (1830) (ヤヘガヤ屬) は屬の記載を伴はず不當の出版であり，*Hackelochloa* O. Kuntze (1891) を用ふるのが正しい。又若し現代の植物學者が大きな複雜な屬を分割する樣な場合には，新名を作る必要なく，多くは Raf. の既に出版した名が役立つ。彼の扱つた範圍は極めて廣く殆ど全世界の植物に關連を持つて居り，各國の植物學者がもつと彼の論文に注意し，少くともモノグラフを書く場合には彼の屬，亞屬，節名に考慮を拂ふ事が希望される。

以上 Merrill 博士の Raf. に對する批判は第三者的立場から公正に行はれ，その主眼が命名上の變更を最少限に止め，今の內に完全な目錄を作つて今後の混亂を未然に防がうとする點にあるのは同感である。尙 Raf. の著書 Autikon Botanikon, Flora Telluriana 及び Sylva Telluriana はアーノルド樹木園で最近複製され販賣されて居る。

又 Ward 大尉採集のビルマ北部の植物が Brittonia 4: 20-188 (1941) で鑑定發表されて居る。この中で日本植物に直接關係のある記事が二つある。一はカクレミノ屬に關するもので，私が植物研究雜誌 **16**: 260 (1940) で述べたと同樣に *Dendropanax* を採用すべき理由を說明してアジア產の種類を全部列擧してある (p. 129-134)。他はキバナシヤクナゲの學名で (p. 148)，使ひ馴れた *Rhododendron chrysanthum* Pallas (1776) よりも，*R. aureum* Georgi, Bemerk. Reise. Russ. Reich 1 : 214 (1775) の方が早い事が明かにされた。

次にアーノルド樹木園からの Contributions は 'Sargentia' と改題され，No. 6 迄出版された。No. 1 (1942) は A. C. Smith 博士とその協力者の 'Fijian Plant Studies II' が載つて居る。No. 2 (1942) は Li 博士の 'The Araliaceae of China p. 1-134' で，17 屬 121 種 32 變種が認められ，各々に檢索表，文獻，記載，標本が引用してある。雲南，北部印度から新屬 *Merrilliopanax* Li が記載され，2 種を含む。カクレミノ屬には *Dendropanax* が採用され，*Eleutherococcus* は *Acanthopanax* に入れられて居る。二三の學名は命名規約に反して居り，批判的な難しい群の取扱ひには稍物足りない點がある。No. 3 (1943) には Luetta Chen 博士の *Sabia* 屬のモノグラフ及び

Merrill 博士との共著の中國，佛印產の *Ormosia* 屬が發表されて居る。*Sabia*（アヲカヅラ屬）は全部で 53 種 11 變種を認め，その中 24 種は新しく記載され，分布の中心は中國で尙新種が見出されるものと期待される。小泉博士が植物分類地理 5：56-57 (1936) に書かれた東亞產本屬の檢索表は，Kew 植物園で Stapf 博士が準備された假りのものを譯されたのだと云ふ事が明かにされた。併し不幸にも表中にある中國產10種の未發表の學名は著者が Dunn と誤記されて居る。本屬は花盤の性質により 2 節に區分され，日本產はSect. Odontodiscus Chen (p. 15) に屬する。アヲカヅラ (*S. japonica* Maxim.) (p. 34, fig. 1) は日本及び中國に廣く分布し，タイワンアヲカヅラ (*S. Swinhoei* Hemsl. (p. 44) は臺灣，中國に產し，又臺灣產のアリサンアヲカヅラ (*S. transarisanensis* Hayata (p. 19) は Sect. Pachydiscus (p. 15) に入れられて居る。次に *Ormosia* 屬に就ては，舊大陸に產する本屬全部 64 種の表が擧げられ，中國に最も種類が多い。その中中國，佛印產の 34 種に就て檢索表說明があり，臺灣特產のベニマメノキ (*O. formosana* Kanehira) (p. 109) も含まれて居る。No. 4 (1943) はカナダ北西部の植物及びハドソン灣，ラブラドル半島のヤナギ屬に關する二論文を含み，No. 5 (1945) には Perry 博士による H. J. Lam 教授の 'Fragmenta Papuana (1927-29)' の英語の全譯が載つて居る。

米國で出版されたものは未だ澤山あるが，ここらで少し目先を變へて英國學者の論文を二つ紹介して見よう。

Hutchinson 博士は 'Neglected generic characters in the family Cornaceae' といふ一論文を Ann. of Bot. n. s. 6：No. 21, p. 83-93 (1942) に發表した。これは廣義の *Cornus* 屬を，主として花序と苞の性質によつて 6 屬に分割すべき事を述べたものであるが，我々にとつては中井博士の說を再確認したもので大して目新くはない。彼も中井博士の 1909 年の論文を引用して全く同感であると述べて居るが，朝鮮森林植物編 16 (1927) 中の四照花科を見落して居るのは誠に遺憾である。*Cornus* 屬の基準種を *C. sanguinea* L. と認むべき事を述べた後，各屬の分布，花序の性質を圖示し，更に屬の檢索表，特徵が記されて居る。ミヅキ屬 (*Cornus*) は北半球の溫帶に廣く分布し飛んで南米ボリビアとペルーに 2 種あり，この群中數も原始的のものと考へられる。次にサンシュユ屬 (*Macrocarpium* Nakai) は現在歐洲中南部，中國，朝鮮と北米カリフオルニアに 4 種あり，これも比較的古い屬であるが，現在はその殘りのものが點々と分布して居ると推測される。熱帶アフリカ東部の高山に孤立して，木本で雌雄花序を異にする頗る變つた一種があり，これを新屬 *Afrocrania* (p. 89) として記載した。ゴゼンタチバナ屬 (*Chamaepericlymenum*) は寒い氣候に適應した地下莖を持つた草本で 2 種あり北半球の溫帶に廣く分布して居る。最も進化したものはヤマボウシ類で，2 個所に隔離分布し，北米に產する 4 種を *Cynoxylon* Raf. とし，ヒマラヤから中國，日本にかけて 3 種を產するヤマボウシ屬を新しく *Dendrobenthamia* Hutch. (p. 92) と名付け，ヤ

マボウシの學名は *D. japonica*(Sieb. et Zucc.) Hutch. (p. 93) と改められた。併しこの兩屬の區別は下位子房及び果實が一個づつ分離して居るか，又は全く癒合して肉質球形の聚合果をなすかだけにあり，中井博士同樣私はこの兩屬を合一する說に贊成であり，尙命名上の問題に就ても私見があるが，それは項を改めて發表する積で居る。

Stearn 博士は 'Nomenclature and synonymy of *Allium odorum* and *A. tuberosum*' と題し Herbertia 11 : 226-245, pl. 263-267 (1946) に主としてニラの學名に就て書いて居る。先づ明かに區別できる二種の植物が *A. odorum* L. の名の下に混合されて居る事を述べ，その異同點を擧げた。一は *A. ramosum* L. で 6,7 月に開花し花被は長さ 6〜10mm で狹長斜上し，白色で背面中肋は紅色を帶び，雄蕊は花被の約半長，蒴は中央以下で最も幅廣く，主に南部シベリア原產であり，他の *A. tuberosum* は 8〜10 月開花し，花は小形で平開し，花被は長さ 4〜7mm で白色，背面中肋淡綠又は帶褐色をおび，雄蕊は花被の 4/5 長，蒴は上半に於て最も幅廣く，東南アジア原產である點等が主な區別である。次に學名の問題を論じ文獻をまとめてある。*A. ramosum* L. (1753) (p. 238) は Gmelin, Fl. Sibir. 1 : t. 11, f. 1 や Bot. Mag. t. 1142 等で圖解され，*A. odorum* L. (1767), *A. tataricum* L. f. (1781) 等はこの異名である。*A. tuberosum* Rottler ex Sprengel (1825) (p. 239) はニラ (韮) で，この學名の發表に至る迄の經緯や基準標本を檢した結果を詳しく述べその寫眞も揭げてある。又 *A. uliginosum* G. Don (1827), *A. tuberosum* Roxb. (1832) 等がこの異名である事を考證して居る。Prokhanov (1931) がニラに採用した *A. chinense* G. Don (1827) は *A. triquetrum* Lour. (1790) に基いたものであるが，花が 'dilute violaceus' とある點等符合せずよく分らぬ種類であると云ふ。尙 *A. Thunbergii* G. Don (1827) (p. 239) に就て述べ，この基となるべき Thunberg 標本室に *A. odorum* としてある 2 枚の標本は，一はニラであり，他はヤマラツキヤウ (*A. japonicum* Regel (1875) で，明かに後者を基準標本と考ふべきであるとなし，兩標本の寫眞が載せてある。終りに Regel の *Allium* 屬の節の區分は不滿足であり，特に Sect. Rhizirideum は 3 節に分けるべき事を提唱した。更に *A. odorum* group 及びこれに近緣の *A. inderiense* group に屬する凡ての種類の出典と檢索表を揭げてある。

○赤の字のつく植物名（前川文夫）

色としての赤は一番目立つもの故，これに基づく植物の名は多い。もつともこの場合には色彩上の嚴密なものではなくて，赤を中心にして一方は黃赤色へ，他方は紫色に迄及ぶ，むしろ多くは青（綠）や白との對照の上から，比較的のものとして附けられて居ると見てよい。その中でアカメガシハ（芽），アカバナ（花），アカモノ（桃の意で僞果），アカネ（地下莖）などは着色部をその儘命名上にも使つて居つて端的にわかるし又響もよい。しかし單なるアカの接頭語のものはアカザ（若い葉），アカシデ（夏の若葉），アカショウマ（葉柄脚と莖），アカマツ（樹幹），アカソ（莖面ト葉柄），アカガシ（材幹の面，